

# 岩手県山田町内と浄土ヶ浜の津波記念碑について

蕨 由美

WARABI Yumi

## はじめに

2011年3月11日の東日本大震災の夜、帰宅難民の一人となった私は、夜明けとともにメディアで知らされる大津波と原発事故の被害の大きさに、只々驚愕するばかりであったが、翌2012年8月、「ワンダートラベラー・山田湾まるごとスクール」のお誘いで岩手県山田町の被災地を訪ね、その後も継続して川端弘行氏ほか被災地の皆さまと交流し、多くのことを学ばせていただいた。その一つに過去の津波を記念した石碑の存在がある。

今回、本誌『野外研究所報告』22号(2014.11)掲載の川端弘行氏と吉川國男氏の論文に関連し、「山田湾まるごとスクール」の活動の中で調べた山田町内と浄土ヶ浜の津波記念碑についての概略と東日本大震災時の状況、三陸の津波記念碑の調査に関するインターネットで入手可能な最新の資料を紹介したいと思う。

## 1. 山田八幡宮参道脇の昭和8年「津波記念」碑を調べる

「山田湾まるごとスクール」の活動は、NPO 野外調査研究所、馬場小室山遺跡に学ぶ市民フォーラム、新潟大学災害・復興科学研究所の3団体が主体となって、岩手県下閉伊郡山田町を皆で訪れ、地域文化を探究する活動である。同スクールの第1回の研修旅行は2012年8月23～25日に行われ、以後、翌2013年8月に第2回目を実施、その他山田町史談会との交流会を3回、また2014年11月にはさいたま市において、秩父と見沼合同シンポジウム「3・11 陸中・山田湾文化復興祈念 『ようこそ「山田湾まるごとスクール」へ』」を開催した。



写真1. 山田八幡宮の「津波記念」碑を見る  
左端は佐藤明德宮司

「山田湾まるごとスクール」第1回の旅では、山田町役場に隣接する山田八幡宮参道の昭和8年(1933)の「津波記念」碑(以下「山田碑」と略す 写真1.)が参加者の目に留まり、吉川國男氏と齋藤弘道氏と共に、銘文の記録と法量の測定を行い、また山田八幡宮宮司の佐藤明德氏に東日本大震災時の被害状況などお聞きした。

この山田碑は、山田八幡宮(山田町八幡町)参道の二の鳥居の向って左横にあり、この地点の標高は、山田町村役場と同じく海拔13mを測る。東日本大震災時の津波は、70m先の一の鳥居(標高10m)の下まで被害をもたらしている。

碑の法量は高さ282cm・幅126cm・厚さ19cmで平石型、石材は井内石(石巻産)と推定され、銘文(註1)は次の通りである。

表面（右欄）には、大きなわかりやすい書体で、山田町にある6基の津波記念碑とほぼ一致する5か条の教訓が刻まれている。

一方、裏面（下欄）には、他の5基とは異なって、難解かつ古風な文体と書体の長文で「奮励努力は事業成功の基礎にして、和衷協同は集団福祉の源泉なり」と書き始め、被害の状況、天皇皇后の御見舞と下賜金及び全国同胞の義援へ感謝を述べ、一致協力復興に邁進する意気と、「東京朝日新聞社より配當の義捐金を以てこの記念碑を建て」たことが記してある。

撰は山田町長石川敏藏、書は教育者で後に巖手日報主筆や岩手毎日新聞社長を歴任し郷土史料蒐集に尽力した新渡戸仙岳、刻は石巻市の石匠石井敬三郎である。

## 津波記念

- 大地震の後には津浪が来る
- 地震があつたら高い所に集まれ
- 津浪に追はれたら何所でも此所
- 位高い所へのぼれ
- 遠くへ逃げては津浪に追付かる
- 近くの高い所を用意して置け
- 縣指定の住宅適地より低い所へ家を建てるな

石巻市石井敬三郎刻

奮勵努力は事業成功の基礎にして和衷協同は集團福祉の源泉なり  
願は昭和八年三月三日三陸沿岸に襲來せる大津波は轉瞬の間に二千五百の人命を殞  
し二萬の家屋を流壞し三千六百の船舶を流失せり而して我山田町は死者七人傷者二十  
六人流潰家屋三百二十餘戸流損船舶二百七十隻其の他被害擧げて數ふべからず慘亦極  
れり不肖乏きを本町長に承け在任未た六旬ならざるに此の大惨害に遭ひ災後の復舊復  
興を畫策遂行せざるべからざるの重任を負ふ微力菲才固より其器に非すと雖も町民と  
協心戮力し至誠事に従ひ一意成績を擧ぐるの速ならんことを期せり  
此の大變災の雲上に達するや畏くも  
天皇陛下 皇后陛下には深く御軫念あらせられ大金侍従を御差遣遊ばされ小職に對し  
實に有り難き御見舞の御傳旨を賜はり唯々感涙に咽ひたり是れより罹災地を巡視せら  
れ滿洲派遣兵の罹災家族に面接御慰問の御言葉を傳へらるまた 兩陛下より御内帑金  
御下賜あり次いて 皇后陛下より傷病者に對し御賜品あり一同天恩の優渥なるに感泣  
せり又之れに次いて全國同胞の義捐に係る多量の金品を受く皆其厚意深情に感激せざ  
るなし是に於て我々六千八百の町民は斯の有りがたき御聖旨に奉答し深厚なる同胞の  
情意に酬いんかため從來町の煩ひを為せる黨同伐異の弊風迹を潜め一致協力復舊復興  
に勇往邁進せんとするの意氣頓に昂まれるは實に本町將來の發展に資する所以にして  
慶すべきの事たらずんばあらず仍て茲に東京朝日新聞社より配當の義捐金を以てこの  
記念碑を建て災害の概況及善後措置の大略を記し以て後昆に告ぐ

昭和十年三月三日

山田町長七位勲七等石川敏藏撰

新渡戸仙岳書

八幡町を含む山田地区では家屋 2571 棟中 62%にあたる 1593 棟が被災している。(註 2)

佐藤宮司のお話では、「大津波は神社の一の鳥居と町役場の下まで来て止まったが、大火が二日間町を襲い、その火の手が神社ふもとまで来た。ご神体を持って逃げたが、類焼寸前で消火され、事なきを得た。一方、低地の北浜にあった大杉神社は、コンクリートの社殿を残して壊滅、がれきの中からご神体をお救いした」とのことで、八幡宮のある高台まで逃げて、助かった町民も多かったという。

明治 29 年 (1896) と昭和 8 年 (1933)、および 2011 年の津波の到達地点は、八幡宮と町役場のある高台の直下で一致しており、まさにこの山田碑設置場所は、「津浪に追はれたら何所でも此所位高い所へのぼれ」という銘文通りの地点であった。

## 2. 再建された宮古市の名勝浄土ヶ浜の「大海嘯記念」碑

翌 2013 年 8 月 30 日～9 月 1 日に行われた第 2 回「山田湾まるごとスクール」では、最終日に宮古市の崎山貝塚と観光名所の復興として再整備されたばかりの名勝浄土ヶ浜を訪ねた。その際、屏風岩の下に山田碑よりさらに大ぶりの昭和 8 年「大海嘯記念」碑 (以下「浄土ヶ浜碑」と略す) と昭和 35 年チリ地震の津波記念碑を見つけ、撮影することができた。(写真 2.)

表面は山田碑に類似した 5 か条の教訓であるが、3 条目は、「津浪に追われたら何処でも高い所へ」とのみ記され、「此所位高い所へのぼれ」の文言は無く、5 条目は「家を建てるなら津浪の来ぬ安全地帯へ」となっている。また裏面には、被害状況として「宮古地内は幸にして被害少く流失戸数 4 戸、溺死者 2 名なり」に続けて、東京朝日新聞社読者よりの義援金をもって建設したことが記されている。

新しい基壇に建つ高さ 3.16m のこの石碑が、東日本大震災直後にどのような状況だったか知りたく、インターネットで調べてみると、「みやこ百科事典 ミヤペディア」(註 3) に次のような記述があった。

「この石碑は大津波により土台が大破し波にのまれて消失した。震災直後に浄土ヶ浜を訪れ取材した際にも確認したが、この石碑は消失しており誰もがきっと津波がさらって行ったのだらうと思っていた。震災から数ヶ月が経ちすっかり形状が変わってしまった通称・奥浄土ヶ浜の石浜を元通りにする工事がはじまった。その際に「沼」と呼ばれる入江の海底に石碑が沈んでいるのが発見されローダーで引き揚げられた。それが写真の寝かされた石碑だ。」(写真 3.)



写真 2. 浄土ヶ浜の「大海嘯記念」碑



写真 3. 被災した浄土ヶ浜碑 (註 3)

山田碑が文字通り「此所位高い所へ」と津波避難の具体的な安全地点を指しているのに比して、浄土ヶ浜碑は建立地点の安全性は特に示さず、また実際、東日本大震災の津波で被災していた。その設置場所に関しては、おそらく地点の安全性より、人目に触れやすい観光名所であることが優先され、防災意識を高めることが意図されたためであろうと思っただが、200基以上あるといわれる三陸の昭和8年津波記念碑が具体的に津波襲来時の安全地点を示すのか否かという謎を私に抱かせた記念碑でもあった。

### 3. 山田町船越と大浦の「大海嘯記念」碑の状況

2015年1月23～25日、山田史談会と山田湾まるごとスクールの第3回交流会のため山田町を訪ねた際、JR 船越駅北側にある山田町船越の「大海嘯記念」碑（以下「船越碑」と略す 写真 4.）と、大浦漁村センターにある大浦の「大海嘯記念」碑（以下「大浦碑」と略す 写真 5.）を実見した。

両碑とも昭和8年大津波の教訓を刻んだ記念碑で、表面の銘文は、「大海嘯記念」の題名以外の5か条は山田碑と同文である。また両碑とも裏面には船越区・田の浜区・大浦区の被害状況と東京朝日新聞社へ寄託の義捐金二十余万円を罹災町村へ分配した残金で建てたことが記されている。



写真 4. 船越の「大海嘯記念」碑

大浦碑をご案内くださった山田史談会会長の川端弘行氏によれば、この大浦碑は元の位置より二度移転し、今回の2011年大津波では無事だったが、元の位置は浸水地域となったとのことで、碑文の3条目に「津波に追はれたら何處でも此所位の高い処へ」と刻まれているが、「建立位置は浸水の際を示すものではなく、集落の入り口など地区の人々の見やすい位置を選んで建立したもののようなものである」との見解であった。



写真 5. 大浦の「大海嘯記念」碑 左端は、川端弘行氏

その他の石碑については、川端氏の聞き取り調査では、田の浜地区の碑は元の位置で浸水して倒れ、一方、大沢地区の碑は移設されていて無事であったという。

実見はしていないが、川端氏の報告によれば、織笠地区の「大海嘯記念」碑は、3条目が「津波の前には海水がひける」、4条目は「住宅は津浪浸水線より高い所へ」と他の記念

碑と違った記述になっている。

また、大浦・田の浜・船越・山田・大沢の碑にある「県指定住宅適地」という文言については、実際そのような県指定があったのかは、岩手県総務部に問い合わせても、「詳細不明」で定かではないとのことであった。(註4)

明治29年津波の記念碑は、文章が難解で、また概ね供養目的であり、年数を経るに従い注目されずに風化して、防災目的に十分生かされてこなかったことへの反省から、昭和8年津波後の記念碑は、平易で具体的な記述を旨として建てられたという。

確かに「此所位の高い処へ」という記述は、具体的でわかりやすいが、東日本大震災時の被災状況から絶対的に安全な場所とは言えず、津波記念碑を防災教育の資料として活用するには、再考を要すると言えよう。

さらに共通する1条目の「大地震の後には津波が来る」の銘文についても、昭和35年(1960)の地球の反対側で起こったチリ地震のような津波には当てはまらない。

浄土ヶ浜碑の横にあった宮古ロータリークラブが建てたチリ地震津波記念碑(写真6)には「地震がなくとも潮汐が異常に退いたら津波が来るから早く高い所に避難せよ」と記されており、織笠の碑の「津波の前には海水がひける」という警告もまた、一理あると言えよう。



写真6. 浄土ヶ浜の「チリ地震津波記念碑」

#### 4. 津波記念碑の活用と調査研究の現段階

200基以上あると言われている昭和8年津波記念碑と明治29年津波供養碑、及び昭和35年チリ地震津波記念碑について、東日本大震災後、その実態調査と防災資料としての検討が各地域の研究機関で行われてきている。

現在インターネットで閲覧可能な報告資料として次のサイトがあげられる。

(1) 津波被害・津波石碑情報アーカイブ<国土交通省 東北地方整備局

<http://www.thr.mlit.go.jp/bumon/b00045/road/sekihijouhou/index.html>

津波災害から円滑な避難と津波災害抑制の提案のため、津波の浸水範囲や石碑等の津波史跡、街道の道路位置等の資料を調査、収集したデジタルデータである。津波石碑については、津波デジタルライブラリ(東北大学津波工学研究室)をもとに、青森・岩手・宮城三県の津波を記念する石碑317基を一覧で整理、建立場所が特定できた190基の石碑を地図上にプロットし、碑文等の内容を個票(カルテ)で整理してある。

この190基の石碑と東日本大震災による浸水範囲との関係は、浸水線内が53基、浸水線

上が 54 基、浸水線外が 83 基と報告されている。

山田町の事例としては、船越地区の 3 基について詳細な記述がある。前述の東日本大震災で無事であった船越碑と津波で倒れた田の浜の石碑のほか、海蔵寺境内にあった昭和津波の石碑について、この碑は避難などの教訓の記述のない慰霊碑で、全壊した海蔵寺建物や石造物と共に津波で被災し転倒したことが写真入りで記録されている。

190 基の石碑には、昭和の「此所位の高い処へ」の教訓型石碑だけでなく、明治津波の慰霊目的の石碑も含まれているが、このデータを用いることにより、東日本大震災浸水域との綿密な相関を検討する手がかりが得られることと思う。

一覧表は暫時更新されているが、まだ空欄や古い情報もあり、新しい情報が寄せられることによって、より拡充されたデータとなることを期待したい。

(2) 目時和哉「石に刻まれた明治 29 年・昭和 8 年の三陸沖地震津波」『岩手県立博物館研究報告』第 30 号 2013 年 3 月

<http://www2.pref.iwate.jp/~hp0910/kenkyu/data/kenkyu30/no30p33.pdf>

明治 29 年・昭和 8 年の三陸沖地震による津波被害後に建立された「津波記念碑」について、それぞれの性格及び建立後の経過について岩手県内の事例に基づき検討を行っている。明治 29 年の津波の石碑は犠牲者の供養を旨としたのに対し、昭和 8 年の東京朝日新聞社による義捐金を用いて建立されたものは、町村毎に内容・形態は異なるもの、二度の津波被害から得た教訓を体現しているとのこと。なお、著者は「津波記念碑」の総称に替えて、「近代津波モニュメント」と再定義することを提案している。

(3) 「災害発生地の今昔 <津波碑と明治三陸・昭和三陸地震津波>」メールマガジン「自然災害情報の収集・発信の現場から」第 23 号（2011 年 12 月 09 日発行）<防災科学技術研究所ライブラリー

<http://dil.bosai.go.jp/dilmag/dilmag23.html>

(4) 「津波碑調査―明治・昭和・チリ津波と平成大津波―」<立命館大学 歴史都市防災研究所

[http://www.rits-dmuch.jp/jp/project/tsunami\\_monument.html](http://www.rits-dmuch.jp/jp/project/tsunami_monument.html)

Google マップを用いた「宮城県津波碑分布図」は、津波碑の状況を流失・倒壊・健在に分類して色別に明示している。

(5) 岡本泰典『「石」が伝えるメッセージ』「東北の大地からの便り」<岡山県古代吉備文化財センター

<http://www.pref.okayama.jp/kyoiku/kodai/touhokukara8.html>

(6) 盛岡市遺跡の学び館 第 12 回企画展「災害の歴史:遺跡に残されたその爪跡」

「Ⅶ 災禍のいしぶみ―供養碑と海嘯碑」平成 25 年度企画展図録（サンプル）

[http://www.city.morioka.iwate.jp/dbps\\_data/material/files/000/000/012/995/kikaku2013zuroku-sample.pdf](http://www.city.morioka.iwate.jp/dbps_data/material/files/000/000/012/995/kikaku2013zuroku-sample.pdf)

関連学芸講座スライド：千田和文「災禍のいしぶみ」

[http://www.city.morioka.iwate.jp/dbps\\_data/material/files/000/000/012/769/2013gakugei-kouza03-shiryou.pdf](http://www.city.morioka.iwate.jp/dbps_data/material/files/000/000/012/769/2013gakugei-kouza03-shiryou.pdf)

## 5. 小谷鳥の山腹に建てられた「東日本大震災 祈りの慰霊碑」

2013年6月、私たちは山田町大浦の小谷鳥地区で、津波に流されてトイレの土台だけ残った小谷鳥公民館の無残な姿を見た。

(写真7.)

この公民館は、小谷鳥漁港より一段高い山の裾にあって、この地区の避難所になっていたが、ここに避難していた住民16人中10人の方々が亡くなられたとのことであった。

2015年1月に訪ねた際は、小谷鳥公民館跡の裏山の山腹に、黒御影石の「東日本大震災 祈りの慰霊碑」が建てられ、お参りするための階段状の細い登り道も付けられていた。(写真8. 9.)



写真7. 被災した小谷鳥公民館跡 (2013. 6. 22)



写真8. 「東日本大震災 祈りの慰霊碑」



写真9. 慰霊碑への登り道

この石碑には「2011年(平成23年)3月11日 午後2時46分 マグニチュード9.0 津波の高さ10m 津波遡上高28m」の銘文と共に、小谷鳥公民館で亡くなった方々を含むこの地区の犠牲者18名の名前が記されている。

小谷鳥公民館と漁港を望む山の中腹という高台を選んで建てられたのは、安全と思えた避難所で未曾有の津波にのまれて命を落とされた方々への慰霊の念と、もうこの碑が再び津波で失われないように、またいざという時にはこの慰霊碑までの登り道が避難路として活かされることを視野に入れたからであろう。

## おわりに

東日本大震災後、被災地には慰霊碑を含め様々なモニュメントが建てられている。石碑は堅牢で残りやすいが、次世代に伝える努力なしでは、一部の明治・昭和の津波記念碑のように数十年の歳月の中で忘れられ、草むらに埋まって風化していくことも避けられないことである。本誌 22 号で吉川國男氏が提案されているように、刻字に白色塗料を塗り込むことや、設置場所に説明板を建てるなどの積極的な活用が必要であるが、さらに説明板には、当該石碑の東日本大震災時の状況、特に設置場所の被災の有無や、移転されている場合はその経緯と状況を付け加えることも、防災情報として必要と考える。

明治・昭和の津波記念碑、さらにこの古碑に加えられていく平成の新しい記念碑が、今後も世代を超えて大切に維持され、近現代の津波災害の歴史を伝えつつ、そしてもうこれ以上悲しい歴史を重ねないための警鐘となるよう、心から祈る次第である。

なお、拙文を記すにあたって、ご教授いただいた山田史談会会長川端弘行氏、NPO 野外調査研究所の吉川國男氏、山田碑の銘文記録にご協力くださった「馬場小室山遺跡遺跡に学ぶ市民フォーラム」の斎藤弘道氏に謝意を表します。

## 註

1) 裏面銘文のうち、次の□内の文字は異体字を使用しているが、フォントがないので標準の文字で表記した。「微力菲才」「感涙に咽ひたり」「御聖旨」

なお、川端弘行「三陸山田町内に所在する昭和 8 年大海嘯碑について」『野外調査研究所報告』22 号 2014.11 にも、川端氏が調査し、旧字異体字を常用文字で手書きした銘文記録が掲載されている。

2) 「東日本大震災大津波の被災状況 2013.1.4 現在」『あの日から明日へ向かって 東日本大震災 山田の記録』2013.3.11 伝津館・山田町大震災記念誌編集委員会発行

3) 「2011/08 津波供養碑と波よけ地蔵」<「わがまち石碑巡禮」<「宮古の石碑」<「みやこ百科事典 ミヤペディア」

[http://miyapedia.com/index.php?title=2011/08\\_%E6%B4%A5%E6%B3%A2%E4%BE%9B%E9%A4%8A%E7%A2%91%E3%81%A8%E6%B3%A2%E3%82%88%E3%81%91%E5%9C%B0%E8%94%B5](http://miyapedia.com/index.php?title=2011/08_%E6%B4%A5%E6%B3%A2%E4%BE%9B%E9%A4%8A%E7%A2%91%E3%81%A8%E6%B3%A2%E3%82%88%E3%81%91%E5%9C%B0%E8%94%B5)

4) 川端弘行「山田町内の津波記念碑の位置と 3.11」『第 2 回ワンダートラベラー・山田湾まるごとスクール 資料』2013.8.30 新潟大学災害・復興科学研究所発行